

# E-13 建築空間のイメージに関する研究

奈良女大家政

梁瀬慶子・花園利昌

目的 建築計画あるいは室内計画に際して、空間が人びとに与える心理的効果も多方面から分析することにより、能率的に的確で人間的な空間を提供しうると思われる。本研究では、その基礎的研究として建築空間から人びとが受けとるイメージに関して、その因子構造の分析を試みた。

方法 われわれがものに対していただく感じをとらえる心理学的手法の一つである、意味微分法 (Semantic Differential 法 以下 SD 法と略記する) を用いた。対象としては、昭和47年5月に改築された奈良女子大学家政学部棟内教室・実習室などを中心に旧校舎、前庭などを加えてとりあげた。被験者には、本学々生30名を起用した。

結果 建築空間のイメージに関する因子空間は、4つの主要因子、すなわちく美しさ < 気持ちよさ > などの因子をもつ Evaluation (価値) 因子、くはなやかさ >、く平易さ > を含む Activity (活動性) 因子、く新しさ > く明るさ > を含む Lightness (明るさ) 因子、そしてく強さ > の因子として Potency (力量) 因子によって構成されていることがわかった。

また、空間の特性によって抽出される因子の重要度には多少差があり、例えば教室については因子の重要な順に、気持ちよさ、新しさ、強さ、美しさ、はなやかさ、平易さ、明るさと並べることができ、教室という空間は Evaluation 因子として気持ちよさが最も重要視され、次いで明るさの因子が大切であると思われる。また、実習室では気持ちよさよりも明るさや活動性が重んじられなければならないことがわかった。